

海外フィールドワーク実習

2年間の実践をふりかえる

長崎大学 増田 研

この特集の目的は、多文化社会学部において開講されているフィールドワーク・モジュール科目「海外フィールドワーク実習」の2年間にわたる実践をふりかえり、その教育実践を報告するとともに、そうした実践が含む将来的な意義を検討することである。

フィールドワーク・モジュールは、1. フィールドワーク入門、2. フィールドワーク基礎実習、3. アーカイブ実習、4. 映像・デジタルアーカイヴ実習、5. サーベイ基礎実習、6. インタビュー調査基礎実習、7. 海外フィールドワーク実習から構成される、一群の関連科目モジュールである。多文化社会学部の学生は1と2を1年次に必修科目として履修し、3～6までの4科目のうち2つ以上を選択することが卒業要件として求められている。

このモジュールは、学部設置準備段階(2010～2013年)においては当初「リサーチスキル」のモジュールとして構想されていた。その後、設置申請の段階で名称が「フィールドワーク・モジュール」に変更されたが、アカデミックな調査に必要な最小限のスキルを、実習活動を通じて身につけるという点では、その核心はジェネリック・スキルの体得にあると言ってよい。他方で多文化社会学部の教員の半数近くが社会学、人類学、歴史学、考古学といったフィールドワーカーであることが、このモジュールの実現には大きく寄与している。現場・野外(フィールド)での一次資料の収集を通じて着想を得、課題を発見し、漸次的に問題設定を進め、エビデンスを駆使してエスノグラフィーを仕上げていくプロセスは、本学部の、とりわけ社会動態コースを担当する教員にとっては自らが経験し、かつ、後進にも伝えるべき学問の道筋である。こうしたモジュールを開設できたのは、ゼロからカリキュラムを設計できるという新学部ゆえのメリットであった。

では、海外フィールドワーク実習はどのように構想されたのであろうか。この科目の構想には3つのコンテクストがある。第一のコンテクストは多文化社会学部の根幹となる人材育成の哲学であり、2013年頃に「グローバル人材育成」や「高度専門職業人」といったキーワードでもはやされていた日本の高等教育行政の

トトレンドである。「グローバル人材」というイメージしにくい人間像が、多文化社会学部の教育の現場において声高に唱えられることはない。むしろ人文社会系の学問空間においてはそうしたお題目を相対化することに知的生産の刺激を見いだすほうがふつうだろう。それにも関わらず、多文化社会学部の（公的な）設置理念には「グローバル人材育成」が濃く味付けされているし、それは欧米を中心とした外国諸大学への留学がカリキュラムのなかにビルトインされていることから分かる。

第二のコンテクストはいうまでもなく、多文化社会学部カリキュラムにおけるフィールドワーク教育の重点化である。この点についてはすでに述べた。

第三のものは、長崎大学内部のコンテクストである。長崎大学は熱帯医学研究所や大学院国際健康海発研究科（現・熱帯医学・グローバルヘルス研究科）を中心としてアフリカとの強い関わりを持つ。長崎大学病院から最初の医療支援団がケニアのナクルに派遣されたのが1960年代であり、その後の国際協力事業団（現・国際協力機構、JICA）との共同プロジェクトの実施を経て、2005年にはケニアの首都ナイロビに拠点が設置されている。このケニア拠点が長崎大学にとっての研究教育の基盤として機能していることを一つの背景として、「新学部のフィールドワーク実習がアフリカで実施されること」を筋道の通った物語として構成できたのである。このような科目設置物語を構成できる大学は日本にはほとんどないだろう。

以上をまとめれば、多文化の海外フィールドワーク実習は、グローバル人材育成、フィールドワーク教育、長崎大学のアフリカとの関わりという3つのコンテクストが自然と流れこむところに成立したと言えそうである。

この特集では、海外フィールドワーク実習の教育実践を振り返るために、2つの報告を用意した。ひとつめは科目責任者である増田によるもので、主として企画と実施、運営に関する報告である。もうひとつはこの科目の教育面を中心的に担った3人のフィールドワーク・コーチングフェロー（CF）による詳細な実践報告である。2つの報告を読めば分かることだが、海外フィールドワーク実習は単に「ザンジバルに渡航して現地を体験してきた」だけではない、考えつく限り、そして可能な限りの活動を詰め込んだ一大実験プロジェクトである。対象となる学生が学部生（undergraduate）であるというリミテーションを考慮しても学術的な上位レベルを目指したし、パネル展示、写真展、ギャラリートーク、ワークショップ、その他の派生的プロジェクトの展開といった、単位数（一単位）にはとうてい見合わないアクティビティを詰め込んでいる。そうした、いわば「つねに活性状態にある」活動が実現できたのは、CFたちの献身的な指導を見込めた

からである。CFによる報告は、この科目の実践のあらましを述べるに止まらず、彼ら自身のフィールドワーク指導の軌跡の反省的述懐ともなっており、これからの指導実践にとって貴重な記録となるであろう。